【レポートタイトル（必須）】
このほかに、講義名、担当教員名、学籍番号、氏名等を記載する必要があります。

石川淳短編小説選

○○○○（氏名）

１．はじめに

本レポートでは、石川淳の短篇「焼け跡のイエス」、「雪のイブ」の小説テクストを読み進めるとともに、石川が寄稿していた『群像』、『文学界』をはじめとする文芸誌の記事を参照しながら、作家の戦後意識について論じていきたい。

【レポートの問題、目的を提示】
レポートの問題設定（何がテーマなのか）、目的（書き手は何を伝えたいのか）を明確にします。

２．「焼け跡のイエス」「雪のイブ」の「健全な道徳」としての「淫蕩」

まず、「焼け跡のイエス」では、戦後、――テクストの記述によれば「昭和二十一年七月の晦日」に東京の「焼跡」で開かれた闇市らしき情景が語られている。翌日には官憲によって「市場閉鎖」に追いやられるという、束の間のカーニバル的な祝祭的空間ともいえるかもしれない。ただし、その情景は「わっと食らいつく不潔な皿の上で一口に勝負のきまるケダモノ取引」といった具合の、いかにも貧しく、いかにも不衛生なものであった。その象徴的な記述が、以下の一節である。

【引用①】文中に引用する場合は、「」でくくる。引用文は改変してはいけません。一字一句そのまま引用。

> 人間の生理があたりをおそれず、こう野蛮な形式で押し出て来ると、健全な道徳とは淫蕩よりほかのものではなく、肉体もまた一つの光源で、まぶしく目を打ってかがやき、白昼の天日の光のほうこそ、いっそ人工的に、おっとりした色合に眺められた。(1)

【引用②】長く引用する場合は、このように前後を一行空けて、一段下げて全体引用。

ここで語られる「健全な道徳」としての「淫蕩」という倒錯した表現こそが、この小説の基調をなしているモチーフであると言えるだろう。語り手である「わたし」は、そこへ現れた汚らしい少年がムスビ屋の女の「はだかの足」に抱きつこうとした行動に巻き込まれ、市場の人々に敵意をもたれることになる。もともとは「少年」に向けられていた「ある強い感情」、すなわち「恐怖」は、いつのまにか「わたし」に向けられ、結果として市場の外へと逃げ出さざるを得ない状況に至る。

その後、その少年の行動を聖書の記述にある「イエス」になぞらえ、その「神学的意味」について思索していた「わたし」であったが、いつしか上野の山から清水堂にさしかかったとき、当のその少年が後をつけてきていることに気づく。逡巡の末に振り返った「わたし」は少年と取っ組み合いになるが、すぐに組み伏せる。だが、その少年の「なめらかな皮膚の感触」に「恍惚となるまでに戦慄」し、結果、その少年は「イエスであって、クリストであった」ことを痛

烈に悟る。

イエス・キリストを救い主とする聖書の言葉を文学的なレトリックによって翻案しながらも、末尾には、少年に対する欲情という倒錯した感情が描かれている。こうした「淫蕩」、「倒錯」を露骨に描いているのが、この小説の特色であるといえるだろう。

また、「雪のイブ」では、「ガード下」、「カストリ」といったモチーフによって表象される戦後の貧しい状況のなかで「パンパン」として働く女性を描きながら、エデンの園におけるアダムとイブの現在の物語が変奏され、「原罪の捏造元」を「ローマ教会秘史」に求めている(2)。いずれの小説においても、キリスト教をモチーフとして扱いながら、涜神的ともいえるまでの露骨な権威への批判精神を盛り込まれている。この点が、これらの小説の真髄をなしていると言えるだろう。

【自分の意見】先行研究や資料を引用した上で、自分の言葉で意見、主張を書きます。

【本論の構成】このレポートの場合、本論が二つ（２．と３．）あります。別の視点、事例について調べ、まとめで焦点を絞りましょう。

３．『群像』、『文学界』誌面か読み取れる作家の戦後意識

つづいて、石川淳が寄稿していた文芸誌『群像』、『文学界』の誌面から、その戦後意識を読み取っていきたい。たとえば、『文学界』の 1952（昭和 27）年 1 月号には、「特集　現代日本の知的運命」と題して、「政治・社会」、「宗教・道徳」、「文学・芸術」をテーマとする座談会が掲載されている。そこでは、「講和条約が成立し、独立の名目は与へられたものの、日本のおかれた位置の極めて不安定であることは周知のとほりである」(3)と前提されており、経済企画庁（編）『経済白書　日本経済の成長と近代化』に「もはや「戦後」ではない」(4)と記載されるわずか四年まえの段階でなお、占領体制から脱却したばかりの日本の不安知な立場が表明されている。石川淳は、その年の二月号に「孤独と抵抗」(5)を書き、三月号には、「芸術家永遠の敵」(6)を書き、さらに四月号には「芸術家の人間条件」(7)を書いている。とくに「芸術家の人間条件」では、「イエス」は「ぼろを著た悲惨な絶望的なガキども」の一人であった、というモチーフが再び語られており、救い主として語られるイエス像を「一個の野蛮人」として語りなおしている(8)。こうした記述から、「焼け跡のイエス」や「雪のイブ」の「ケダモノ」のごとき人間描写が、戦後日本の言説空間の中での石川淳の語りのなかで、幾度も再演されているモチーフであることがわかる。

４．まとめ

以上、石川淳の短篇小説のテクストと読み進めるとともに、作家のエッセイの寄稿された『群像』、『文学界』の誌面から読み取ることのできる戦後意識について論述してきた。その「ぼろを著た悲惨な絶望的なガキども」の一人としてのイエスの表象は、まさに作家のエッセイのなかで再演されていった戦後のモチーフのひとつをなしているものであることを読み取ることができた。

【まとめ】ここでは新しいことを論じる必要はありません．本論で論述した内容を、文字通りまとめ、読み手に分かりやすく伝える箇所です。要約力が問われます。

【参考文献】

（１）　石川淳『石川淳短編小説選――石川淳コレクション』（筑摩書房、2007 年 1 月）

（２）　（１）と同じ。

（３）　「特集　現代日本の知的運命」、『文学界』（文着春秋新社、1952 年 1 月）

（４）　経済企画庁（編）『経済白書　日本経済の成長と近代化』（至誠堂、1956 年）

（５）　石川淳「孤独と抵抗」、『文学界』（文着春秋新社、1952 年 2 月）

（６）　石川淳「芸術家永遠の敵」、『文学界』（文着春秋新社、1952 年 3 月）

（７）　石川淳「芸術家の人間条件」、『文学界』（文着春秋新社、1952 年 4 月）

（８）　（７）と同じ。

【参考文献】これがなければレポートではありません。「参考文献」、「引用文献」、もしくは註記事項とあわせて、「註および文献」などと表記します。
　書き方の形式は講義ごとに指定されることもあるので、事前によく聞いておきましょう。

（以上、2,304 文字）